

近代文学と『今昔物語集』との関連

— 取材作品覚え書 —

藤 本 徳 明

はじめに

『今昔物語集』は、日本説話文学史上、最大にして最高の作品と呼んでよいであろう。そのゆえに、芥川竜之介以来、多くの日本近代文学の作家たちは、これに取材し、また、これと関連する多数の作品を生み出してきた。説話文学の受容史の上からも、近代文学と伝統との関連を問う上でも、いわゆるテーマトロジー(主題学)の視座からも、両者の関連を検討することは、なかなか重要であり、興味のある課題だといふことができる。

私も、これらの問題にかねてから関心を抱き、自分なりの検討を続けてきたものであるが、本稿では、ほぼ『今昔物語集』(以下『今昔』と略す)の巻次に従い、どの説話を、どのような近代文学の作品が取材しているかの粗い覚え書を作成してみることにした。本稿で、たとえば、一一一とした場合は、「日本古典文学大系」本『今昔』巻第十一「聖徳太子於此朝始弘仏法語第一」をさす説話番号であることをあらかじめお断りしておく。

ところで、『今昔』自体、説話総数一千話をこし、小説話数も加えればさらにその数を増すことになる巨大な説話集であり、近代文学の諸作品に至っては、とうてい通読不可能な膨大な情報量を持つ。したがって、非力な一人の手によって、両者の関連の全貌を明らかにできるはずはないが、管見に入った二百編近くの関連作品と三百数十箇

所の関連説話だけでも、とりあえず公にしておくことは、向後の研究にとってそれなりの意義はあろうと思われる。当然多いであろう見落としや思い違いを恐れず、覚え書として記録したゆえんである。不十分な点については、大方のご示教を仰ぐなかで、随時訂正の機を得たいと思っている次第である。

なお、周知のように、『今昔』は『日本霊異記』などの先行説話集の多くを継承しているし、『宇治拾遺物語』その他後代の文献にも、密接な関係を有すると思われる類話を多く持っている。また汎世界的分布の説話もある。したがって、近代文学のある作品が、『今昔』のある説話に類似した内容をもっていたとしても、ただちにそれが『今昔』そのものに直接取材したと即断できない場合も多い。その辺の微妙な差異を明らかにしておくために、一覧表という形ではなく、文章形式で記すこととしたものである。さらに、関連の具体相をも明らかにし、初出や流布本をも示すべきであったろうが、紙数の制約などもあり、そうした事項は割愛するほかなかった。

また、対象とした近代文学の作品は、小説を中心として、若干の戯曲も加えた。童話や古典解説、評論や韻文のたぐいまでは論及しえなかった。

執筆にあたり、参考にさせて頂いた諸先学の学恩に感謝するとともに、この作業の中で見出しえた様々の問題点は、私なりに検討を深め、後日に別の発表の機を得たいと思っている。

『今昔物語集』の中でも、天竺・震旦部、すなわち卷一―卷一〇は、あまり日本近代文学に影響している所は少いといえる。その、少数の受容例の中で、最も早い時期のもの一つに、芥川竜之介の「青年と死」をあげることができよう。芥川が、近代文学における『今昔』受容の先駆者であったことは言うまでもないことだが、「青年と死」は大正三年九月の「新思潮（第三次）」九月号に発表された芥川初期作品の戯曲であり、『今昔』四―二四の竜樹隠形説話に取材したものであった。なお、他にも芥川の天竺部取材作品として、三―二二に取材した「尼提」もある。

興味深いのは、芥川の親友であった室生犀星も、前掲四―二四に取材し、「竜樹菩薩」という作品を物していることである。室生には、震旦部取材作品として、他に一〇―九によった「孔子」、一〇―一一によった「粟」もある。

芥川のもうひとりの親友菊池寛の戯曲「亡兆」も、卷一〇―三六、血染めの卒堵婆の話と関係がありそうである。ただし菊池は、この話を旅行中聞いた伝説と付記しているが、『今昔』を精読していた菊池の、その付記を文字通りに受け取ってよいか否かは疑わしい。なお、芥川の「竜」のモチーフもこの説話と共通しているし、現代作家堀田善衛の「鬼無鬼島」にも同種の話は紹介されている。

別の芥川の友人山本有三の戯曲「盲目の弟」も、四―三四の兄弟の話と似たところがある。なお、杉本苑子「今昔物語ふあんたじあ」中の「馬にされた盗人」（以下、杉本の作品は、すべて「今昔ふあんたじあ」および「続今昔物語ふあんたじあ」所収のものばかりなので、いちいちこれを断わることは略す。）も、この説話をふまえたものである。

井上靖「羅刹女国」「僧伽羅国縁起」の連作は、それぞれ、卷五―一の僧伽羅国商人の話、五―二の獅子の妻子の話と同一題材である。

西域関係に深い造詣をもつ井上であるから、原典の「大唐西域記」に直接取材した可能性もある。

天竺部には釈迦説話が多く、これに取材した仏教書は多いであろうが、それは省略に従いたい。ただし、釈迦を登場人物とする光瀬竜のSF「百億の昼と千億の夜」のような異色作もある。

少年文学の先駆的作品に巖谷小波「こがね丸」があるが、これも凡例に『今昔物語』なども「立案の助けとなせし」としているように、たとえば、五―二一の虎の威を借る狐のモチーフなどが看取できる。が、童話や少年文学における『今昔』の影響を探ることは、本論の直接の目的ではないので、また、別の機会を得たいと思っている。

二

『今昔』も本朝部に入ると、関連作品は、にわかになくなっていく。ことに卷一―は、歴史的に著名な人物を多く扱うだけに、関わってくる作品は枚挙にいとまがないほどである。

一―一の聖徳太子説話と関連する代表的作品は中里介山「夢殿」であろうが、重厚な作品であるだけに、執筆においては、当然『今昔』をも参看しているものと思われる。他にも、坪内逍遙に「聖徳太子と悪魔」、海音寺潮五郎に史伝「聖徳太子」があり、黒岩重吾にも、太子母炊屋姫を扱った小説「紅蓮の女王」がある。SF的なものとして、守屋伝説と巨石信仰の関連に言及した半村良「石の血脈」があり、太子奇蹟談をSF的に解釈した藤本泉「クロノプラスチック六〇二年」がある。邦光史郎「幻の法隆寺」という推理小説もある。

一―二の行基伝中、智光地獄行き説話や魚の蘇生説話は、長田秀雄の戯曲「大仏開眼」中に引かれている。この戯曲は一―七とも関連する。

一―三の役の行者を主人公とした近代文学中の特筆すべき作品は、坪内逍遙「役の行者」であろう。行者の魔術師的側面に言及したものに、幸田露伴「魔法修行者」、小松左京「果しなき流れの果てに」、

半村良「妖星伝」、宗谷真爾「王朝妖狐譚」などがある。

一一一六に出る玄昉を描いた小説に、高木卓「遣唐船」、秦恒平「みごもりの湖」、松本清張「眩人」などがあり、玄昉と広継の対立をも扱ったものに司馬遼太郎「朱盜」、南条範夫「天平の写経師」などがある。

一一一八の鑑真に関連する著名な作品に井上靖「天平の薨」があり、一一一九の弘法大師に関連する大作には司馬遼太郎「空海の風景」があり、菊池寛にも「弘法大師」の作がある。これと、一一一〇の伝教大師を扱った作品に長与善郎「最澄と空海」がある。なお「空海の風景」には、一一二四の久米仙人の話、一一二五の観賢髮剃説話も引かれている。

一一一一の慈覚渡唐説話中の「瀨瀨城」モチーフを生かした伝奇小説に、国枝史郎「神州瀨瀨城」がある。

一一一三の聖武帝説話と一一一九の光明皇后説話(ただし欠文)と関連する作品に前掲「大仏開眼」の他、倉田百三「光明皇后」、有吉佐和子「光明皇后」などがある。

一一一四や二二一一の藤原家始祖たちの説話に関連する作品として、SFの設定のものが、小松左京「遷都」や川田武「戦慄の神像」がある。

一一一七の天智説話と関連する歴史SFに豊田有恒「白村江」があり、当代を背景とした作品に福田恒存「有間皇子」、井上靖「額田女王」、秦恒平「秘色」などがある。

きわだって関連作品が多いのは、一一二四の久米仙人説話であり、小寺融吉「久米仙人」、榊山潤「久米仙人」、武者小路実篤「久米仙人」、杉本苑子「釣る」などがあり、前掲「空海の風景」のように一部引用のものも加えれば、さらにその数は増すであろう。

三

卷二二～卷一五は、仏教説話で著名人を主人公とした話が少いせい

もあり、比較的、関連する小説は少い。

その点、福永武彦「風のかたみ」は、「福永武彦全小説」第九巻に従えば、「素材」または「ヒント」とした『今昔』の説話を自ら十九編あげている注目すべき小説だが、そのうち、一一二八、一四一四二が卷二二～一五の中では引かれている。

また、丹羽文雄の大作「親鸞」も、『今昔』を素材とすること多い作品だが、これに一一三三、一四一四二、一五二二、一五三九が引かれているのも目立っている。

一一三一と同話を原典たる『日本霊異記』よりの引用として、半村良が伝奇SFの大作「妖星伝」のモチーフの一つとしている。

矢代静一の戯曲「妖かし」の源心上人は、一一三二の主人公源信僧都をモデルとしているかもしれないし、小栗虫太郎の「月と陽と暗い星」には一二三四の主人公性空が登場している。山田美妙にも一九一九に関連する「性空上人」の作がある。一二三六の主人公道命は、芥川竜之介の「道祖問答」に登場するが、本話ではなく、『宇治拾遺物語』巻頭説話に取材したものである。

一四一三の道成寺説話は、郡虎彦「道成寺」(「清姫」)、円地文子「清姫」、吉井勇「道成寺絵巻」、三島由紀夫「道成寺」などの多くの戯曲、西口克巳の「道成寺」という小説などに扱われている。

一四二九の敏行冥途行説話は、菊池寛「心形問答」の素材となっている。

次に卷一六～二〇。ここに多く取材しているものは、前掲の丹羽の大作「親鸞」がある。一六一一四の御手代東人の話、一七二四の毗沙門産金の話、一七四五の吉祥天への愛欲の話、一九二二の大江定基の話など愛欲に関わる話が多く、なかんずく一七三三「比叡山僧依虚空像助得智語」のごとき愛欲が発心の縁と化す話は、親鸞思想に結びつくものとして再三引用されている。

他にも、一九一六の鴨の話、一九一七の鹿の話、一九一一の王藤観音の話、一九二〇の大安寺別当娘の話、二〇一一の天竺三天狗の話、

二〇―三四の不孝息子の話など親鸞伝記の中にたくみにとり込まれている。なお、二〇―一の話は、佐藤春夫の法然伝「掬水譚」にもひかれていたことは興味深い。芥川竜之介「運」は一六―三三を素材としたものである。

杉本苑子も巻一六―二〇での取材が目立つ作家である。一六―二一は「沼のほとり」に、一九―二は「出離」に、一九―九は「落花」に、一九―一は「釜の湯地藏譚」に、一九―一四は「白い蓮」に、一九―二七は「家族」に、二〇―一〇は「碁仙人」に、二〇―三四は「父を食った男」に、それぞれ小説化されている。

一六―一六と関連するものに岡本綺堂「蟹満寺縁起」があり、一六―二八と関わるものに、室生犀星「笛吹く人」、木下順二「わらしべ長者」がある。水上勉「霊異十話」中「子捨て」は『今昔』一七―三七とも関連する。

巻一九―二〇には、多くの作家の興味を集める説話が頻出する。すなわち、一つの説話を何人も作家が小説化しているケースもしばしば見られるのである。

まず、一九―二の「参河守大江定基出家語」は前掲丹羽、杉本の他、幸田露伴が「連環記」で、菊池寛が「大江の定基」でとり上げている。なお菊池寛は、その短編集―というより、古典講話的な本「好色物語」では『今昔』から少くとも二〇話以上、古典を小説化した「新今昔物語」では『今昔』から五話とり上げており、『今昔』影響史ともいえるべきものにおいては、見逃せない作家である。

一九―五「六宮姫君夫出家語」は、芥川竜之介が「六の宮の姫君」でとり上げて以来周知の説話だが、菊池寛も「六宮姫君」で扱い、福永武彦も前掲「風のかたみ」で、海音寺潮五郎も「まぼろしの琴」でとり入れている。海音寺も、その短編集「王朝」「続王朝」で、少くとも一〇話以上『今昔』に取材していることに着目しておきたい。なお芥川の作は一五―四七の挿話もとり入れている。

一九―一一「信濃国王藤観音出家語」も、前掲丹羽、杉本の他、久

米正雄「地藏教由来」や、永井路子「新今昔物語」の「逢坂地藏奇験をあらわせる事」の発想に影響を与えているふしがある。永井の「新今昔物語」は、題名から予想されるほど、『今昔』から直接取材した箇所は多くない。

一九―一四「讃岐国多度郡五位聞法即出家語」は、後代の仏教説話集の多くが扱い、『今昔』鑑賞書がほとんどとり上げる説話であるが、近代文学では芥川が「往生絵巻」でまずとり上げ、海音寺潮五郎が「極楽急行」、杉本苑子が「白い蓮」で扱っている。

二〇―七「染殿后為天宮被嬖乱語」は、偶像破壊的なエロティシズムのゆえか、菊池寛「鳴神上人」、海音寺潮五郎「嬖物語」、田辺聖子「恋やつれの鬼」、瀬戸内晴美「中世炎上」、永井路子「新今昔物語」などにとり上げられている。

二〇―一〇は、二〇―七と対照的に、ユーモラスなエロティシズムをもつ説話だが、坪田譲治「道則妖術を習うこと」や菊池寛「外術」、海音寺潮五郎「妖術」、前掲杉本「碁仙人」などがとり上げるところとなっている。

二〇―四五、二四―四五は小野篁説話であり、谷崎潤一郎「小野篁妹に恋する事」、中村真一郎「空に消える雪」、田辺聖子「水にとける鬼」では篁を扱っているが、皆主として「篁物語」などに取材している。なお室生犀星「仏頭記」は二〇―三に関連している。

四

巻二二から、いわゆる世俗説話の部に入るが、二二は、わずかに八説話の小さな巻で、当然取材作品は少い。ただ、二二―七の高藤説話は、海音寺潮五郎「雲のかけ橋」、菊池寛「狩場の雨」の題材となっている。

注目されるのは、二二―八「時平大臣取国経大納言妻語」で、ドラマチックな面白さがあり、谷崎潤一郎の名作「少将滋幹の母」の題材に選ばれたのははじめ、松居松葉「時平の大臣」、菊池寛「時平の女

事」、海音寺潮五郎「妻を奪はる」などにも扱われている。

卷二三には、いわゆる大力説話が一四話収められているが、菊池寛は、「好色物語」中、「大力物語」の中で卷二三の一七、一八、二〇、二四の話を紹介している。他に菊池は「密会厄難」で二三―一六、「競馬と角力」で二三―一五の話にも言及している。また、船山馨「大力開眼」は二三―二二、杉本苑子「怪力」は二三―一九、田辺聖子「鬼の女房」は二三―一五にそれぞれ取材している。

卷二四に目を移すと、福永武彦の王朝を舞台とした長編「風のかたみ」が、二四―一二、二四―二一、二四―二四にも取材しており、田辺聖子が「鬼の歌よみ」で、二四―一、二四―二五、「水にとける鬼」で二四―一三、二四―四五、「鬼の語り」で二四―二〇にそれぞれ取材しているが目立つ。杉本苑子も、「碁仙人」で二四―六に、「あともどり谷」で二四―九に、「待ちぼうけ」で二四―一三に取材している。慈岳川人と地神の話を描いた二四―一三に、福永、田辺、杉本の三作家が共通して着目しているのは興味深い。なお、菊池寛「伊勢」は二四―二〇と関連する。

直接取材した作品とは言いがたいが、二四―一六、一九―二四で活躍する阿部晴明の伝説に関連する作品には、小松左京「女狐」、「糸遊」などがあり、「女狐」のモチーフの一部には二九―四に関わる所もある。小松の「応天炎上」は二四―一に出る源信や紀長谷雄も登場する。

各説話の主人公を登場させたものとして、二四―二三の博雅の登場する室生犀星「笛を合はす人」、二四―三五の業平の登場する今東光「在五中将」、塚本邦雄「露とこたへて」川口松太郎「蕩児業平」、二四―四五の阿倍仲麻呂の登場する高木卓「遣唐船」、井上靖「天平の薨」、「僧行賀の涙」などがある。小泉八雲「死骸にまたがる男」が、二四―二〇と関連していることも付言しておきたい。

卷二五は、いわゆる武人説話の巻だが、巻頭を飾る「平将門発謀反被誅語」は、「将門記」と並び、将門伝説の重要な資料であり、取材

作品はすこぶる多い。幸田露伴「平将門」、真山青果「平将門」、吉川英治「平将門」、海音寺潮五郎「平将門」、「風と雲と虹と」、大岡昇平「将門記」、清水邦夫「われら将門、幻に心もそぞろ狂おし」、豊田有恒「純友VS将門」などがあり、などがあり、その子孫にまで言及した小説まで加えれば都筑道夫「七十五羽の鳥」、宗谷真爾「王朝妖狐譚」などさらにその数を増すであろう。海音寺潮五郎の「悪人列伝」や永井路子の「悪霊列伝」などの史伝にもしばしば扱われている。

二五―七と二九―一九に登場する袴垂については吉川英治に「袴だれ保輔」があり、この作品には二〇―三、二七―四に類する樹上怪異のエピソードもある。福田善之「袴垂はどこだ」は世評高かった戯曲だが、直接袴垂は登場しない。室生犀星「笛吹く人」にも二五―七の袴垂と保輔のやりとりが描かれ、菊池寛「街道の厄難」には二九―一九の虚死の話が描かれている。杉本苑子「かぶら太郎」、海音寺潮五郎「つわもの」にも挿話として二九―一九の話は記されている。阪口安吾「紫大納言」にも袴垂は登場、森三千代にも「保輔の事」という作品がある。二五―七の主人公の藤原保昌は和泉式部と関わって、瀬戸内晴美「煩惱夢幻」に登場する。

海音寺「つわもの」の主題は、二五―一〇によっているが、二五―一二の話にも取材しており、海音寺は他にも、「曠野の恋」をも、二五―一二にもとづいて述べていて、卷二五に寄せる関心が高い作家といえる。

卷二六については、杉本苑子の取材の多いことが目立つ。「鶯の川」は二六―一、「かぶら太郎」は二六―二、「犬がしらの絹」が二六―一、「髪」が二六―一三、「馬にされた商人」が二六―一四、「五位の休日」が二六―一七、「猫をこわがる男」が二六―二〇と七編に及んでいる。

泉鏡花が、郷里に近い能登を舞台とした作品「山海評判記」で、二六―一二と、三一―二一の能登関係の説話を引用しているのも、早い

引用例の一つであろう。他に、菊池寛は二六一四を「密会厄難」として紹介、海音寺潮五郎は、二六一八を「守護神」として小説化、田辺聖子も、二六一九の話を、「樹の上の鬼」の中で紹介している。なお、本巻の取材作品中最も有名なものとして二六一七に材を得た芥川竜之介「芋粥」のあることは言うまでもないところである。

五

巻二七は、いわゆる怪異説話の部であるが、ここでは、田辺聖子の短編集「鬼の女房」中の各編の取材した説話がすこぶる多い。まず、「鬼の語らい」は、二七一ニ、二七一八、二七一九、二七一〇、二七一ニ、二七一三、二七一七、二七一〇の多数にのぼる。「水に溶ける鬼」では、二七一七、二七一八、二七一五、二七一八、二七一四がそうである。他にも二〇四五、二四一三、二四一四五とも関連することは先述した。「鬼の女房」では、二七一三、二七一九と関連し、二三一五の則光の話と関わって「枕草子」にも取材している。「樹の上の鬼」では、二七一八、二七一九、二七一七、二六一九の説話に依っていることが明記されており、他にも、二七一四、二七一ニ、二七一三、二七一四、二七一ニにも取材しているし、一九二七の話も題材として取り入れられている。「鬼の歌よみ」でも二七一八の他、二四一、二四二五など紀長谷雄関係の説話も用いられている。「恋やつれの鬼」は、二〇一七の染殿の後の話をふまえたものである。

次いで目立つのは、福永武彦の「鬼」であり、二七一六が中心の題材となっているが、他に、二七一七、二七一〇、二七一三、二七一四、二七一八、二七一九も集中的に引用されている。なお、福永の「風のかたみ」でも、二七一三六、二七一四四が材料となっている他、先述してきたように他巻からの引用も多い。

杉本苑子の「婢女」「銅の精」は、二七一六と関連ありと考えられ、「あともどり谷」は二七一五と関連すると考えられる。「狩人と猿」

は二七一四に、「きつね妻」は二七一三八に取材している。

阪口安吾「紫大納言」末尾は、二七一五をモチーフとしているようであり、矢代静一「妖かし」は二七一ニを引いている。丹羽文雄「親鸞」には二七一三が引かれ、永井路子「応天門始末」や「悪霊列伝」、南条範夫「応天門の変」は二七一ニが、長谷川修「遙かなる旅へ」では二七一四一が関連している。小泉八雲「和解」は二七一四と関連ありと考えられる。

巻二八は滑稽説話が多いが、巻頭二八一は、滝井孝作が「舎人の失敗」で扱っている。二八一三は、海音寺潮五郎が「好忠の怒り」で、二八一六の史や二八一七の目代の話も「海と風と虹と」の中でとり上げている。この目代の話は、石川淳「紫苑物語」の、算をよくする異族出身の目代という設定にも反映していそうである。杉本苑子は「毒茸と女」で二八一八、「猫をこわがる男」で二八一三、「瓜ひとつ」で二八一四〇にそれぞれ取材している。

菊池寛の「密会厄難」は、二八一ニにも取材し、「奇蹟」のプロットは、二八一四四を応用したものとも考えられる。なお、説話を一部利用したものとして、丹羽文雄「親鸞」が二八一四、瀬戸内晴美「祇園女御」が二八一三八、花田清輝「小説平家」が二八一四〇を用いているなどの例がある。

もとより、ここでも、芥川竜之介「鼻」の素材となった二八一二〇の説話の存在も忘れてはならないものであろう。

六

巻二九は、いわゆる悪行説話が大多数を占め、多くの近代作家たちが、最も興味を寄せた巻の一つだといえることができる。

その点でも、先駆者が芥川竜之介であることは言うまでもなく、彼の文壇デビュー作「羅生門」は二九一八に取材したものであり、「偷盗」は、二九一三、二九一六、二九一七、二九一八、二九一二などを素材としている。問題作「藪の中」は二九二三を独自の手法

で小説化したものである。

芥川の友人菊池寛も、「女強盗」で二九一三、「盗人の良心」で二九一三、「街道の厄難」で二九一九、二九二二、「石のまいた」で二九二八を紹介している。

海音寺潮五郎もこの巻に取材すること多く、「半蔀女」で二九一三に取材している他、「まぼろしの琴」や「芦刈」でも二九一三に想を得ているふしがある。なお、「芦刈」は二九一九、「大江山」は二九一三三に材を得ている。二九一三三は、童門冬二「大江山の哄笑」にも引かれている。

丹羽文雄「親鸞」では、二九一三の女賊の家のそばに親鸞の生家があったとする奇抜な設定をとっている他、二九一九、二九二二、二九二六、二九二八などに、親鸞教成立前後の乱世を物語る素材を得ている。

福永武彦「風のかたみ」は、王朝の盗賊を描く中で、二九一三、二九一八、二九一二、二九一五、二九一三六に取材し、矢代静一「妖かし」は、やはり盗賊を描いて二九一三、二九一二と発想が共通し、新田次郎「鳴弦の賊」も、二九一三他に取材している。

二九一三の、マゾヒスティックな快楽の中で男を盗賊へと仕立て上げる美女の物語は、作家たちの関心を集め、これに取材した作家は、芥川、菊池、海音寺、丹羽、福永、矢代、新田らの多数に及んでいる。二九一三に取材の「藪の中」は、黒沢明監督のグランプリ映画「羅生門」の素材ともなって広く知られたが、これも劇的な内容であるためか、芥川、菊池、海音寺、童門などが取り上げている。

杉本苑子は、「瓜ひとつ」で二九一一、二九一七、「きつね妻」で二九一三、「かぶら太郎」で二九一九、「婢女」で二九二四、「峠の道」で二九二五、「鷲の森」で二九三五と、巻二からもやはり多角的に取材している。

長谷川修「遙かなる旅へ」でも、二九一二、二九二八が鳥部山関係の説話として引かれている。谷崎潤一郎「乱菊物語」は、二九一

二八とやや発想に共通する所がある。

巻三〇は、一四説話の小さな巻であるが、文学的に興味深い説話が多いせいも、近代文学でも多くの名作の源泉となっている。

まず、三〇一、三〇二の平中説話は、谷崎潤一郎の傑作「少将滋幹の母」に引かれていることで名高い。谷崎は三〇一の便器の話題を「乱菊物語」でもとり上げており、彼の汚物趣味ともいうべき一面を仄見せている点でも興味深い。なお、谷崎には「墨塗平中」の作もある。芥川竜之介も「好色」で、三〇一、二を主な素材としている。それはまた、海音寺潮五郎「有為の奥山」の素材ともなり、丹羽文雄「親鸞」にも利用されている。丹羽は巻三〇では三〇一三の浄蔵説話にも取材している。

三〇四の説話は、堀辰雄の秀作「曠野」の題材となっており、滝井孝作「中務大輔の娘」、菊池寛の「ついに逢う身」の材料ともなっている。

三〇五は、芦刈説話として名高いものである。谷崎潤一郎「蘆刈」、菊池寛「あし刈り」、海音寺潮五郎「蘆刈」、北条秀司「芦刈」、杉本苑子「蘆刈りの唄」、加藤一雄「蘆刈」など、すこぶる関連作品が多い。

三〇八は安積山説話。周知のように『更級日記』にも関連説話はあるが、海音寺潮五郎「春宮怨」や福永武彦「風のかたみ」の主題ともなっており、永井路子「新今昔物語」にも言及されている。

三〇九の姥捨山説話も、説話、歌枕などで影響の多い話だが、「姨捨」という題名の名編に、堀辰雄、井上靖の二作があり、深沢七郎「檜山節考」は、現代の姥捨モチーフの文学中最も著名なものである。

三〇一二の説話は、田辺聖子「鬼の語らい」に引用されている。最後の巻三一でも杉本苑子の取材作品が目立つ。三一三を「毒草と女」に、三一四を「馬にされた商人」に、三一三を「指の怪」に用いている。長谷川修「遙かなる旅へ」は三一八、三一三

○にも材を得ている。他に、三一―三は瀬戸内晴美「中世炎上」に、三一―五は滝井孝作「中務大輔の娘」に、三一―三五は川田武「戦慄の神像」に一部用いられている。三一―二六の打臥御子は、円地文字「なまみこ物語」と関連があり、三一―二七の紫苑の伝承は石川淳「紫苑物語」と関連があらうと思われる。

三一―三三の竹取翁説話に関連する作品としては、加藤道夫「なよたけ」、小松左京「藪の花」などがあるが、これらはむしろ、「竹取物語」との関連において論じられるべきであろう。

なお、芥川竜之介「邪宗門」は未完の作品だが、三一―五、三一―二六などに材を得ている他、二〇―二、二〇―三、二〇―六、二〇―七、二七―二にも取材していることを付言しておく。

最後に作家たちの『今昔』を扱った評論について概観しておくならば、これも芥川竜之介「今昔物語について」（昭和二年）が先駆的なもの。次いで小島政二郎「わが古典鑑賞」中「今昔物語」の項が行届いており、佐藤春夫「和田伝訳・今昔物語」への緒言も鋭く、今東光「今昔物語入門」も三八話を選んで興味深い。生島遼一「日本の小説」、唐木順三「無常」や亀井勝一郎の「王朝の求道と好色み」など批評家たちの著作の関連部分にもとりどりの個性が示されている。ただし『今昔』評論史ともいべきものは、当然独立した論稿の対象とすべきものであるから、ここでは文字通りの瞥見にとどめておく。

む す び

以上、『今昔』と関連をもつ近代文学の諸作品を列挙してみたが、管見に入った限りでは、『今昔』から多くの素材を得ている作家として、芥川竜之介、菊池寛、海音寺潮五郎、丹羽文雄、福永武彦、杉本苑子、田辺聖子らあげることができる。

芥川は、文壇に対する『今昔』の紹介者であったばかりでなく、その周辺に、前掲菊池寛の他、谷崎潤一郎、佐藤春夫、室生犀星、堀辰雄ら『今昔』に関心を示した多くの作家を持ち、『今昔』受容史とも

いべきものにおいて、大きな功績をもつ作家といえよう。その受容のしかたも、なかなか個性的であり、すぐれていた。

菊池寛の取材数が多いが、ほとんど『好色物語』において、原文に即した紹介をしたにとどまり、芥川のような独自の解釈や形象化の例は少ない。

海音寺潮五郎は「王朝」「続王朝」のシリーズを中心として、特異な歴史小説の素材としてよく消化した上で、『今昔』の説話を利用している。

丹羽、福永、杉本、田辺は、彼らの作品全般においてでなく、ある特定の作品（作品集）において集中的に『今昔』を素材とした点で共通している。丹羽は「親鸞」で、福永は「風のかたみ」と「鬼」で、杉本は「今昔物語ふあんたじあ」と「続今昔物語ふあんたじあ」で、田辺は、「鬼の女房」で、それぞれ、二〇説話から四〇説話におよぶ大量の『今昔』説話をとり上げているのである。

これは、近代作家の側から見た取材頻度の多いケースだが、『今昔』の側から見て取材された頻度の多い説話（三人以上の作家によってとり上げられた説話―関連作品も含む）を、次に説話番号であげておく。

一九―二 一九―五 一九―一四 二〇―七 二〇―一〇
二二―八 二四―一三 二五―一 二七―二二 二九―三
二九―二三 二九―二八 三〇―一、二 三〇―四 三〇―五

例外もあるが、これらこそ、近代作家から見て、素材としての食指の動く、文学的魅力に富んだ説話群であったといえよう。

古典作品『今昔』と、近代作品とのこうした関連を、個々の問題に即して、さらにきまこまかに追求することは、冒頭にも述べたように、私にとっての今後の課題である。本稿は、そうした作業の基礎資料の一つとして、とりあえず材料を提供するにとどめた。これについても、大方の好意あるご批評を得ることができれば幸いである。

注1 古典と近代文学との関連を問うてきた主な拙論には次のようなものがあり、併せて参看頂ければ幸せである。

『日本海のロマン——伝承・文学にたどる北陸史』（昭51・中日新聞本
刊）

「愛の修羅たち——文学にみる悪女の系譜」（「いしかわ」に昭52年11
号より連載中）

「浦島伝説と近代文学」（昭53・3「金沢美術工芸大学学报」第22号）

「お市の方の愛と死——戦国の伝承と近代小説」（『今昔物語集——説話
文学の世界第一集』昭53・笠間書院刊）

「近代文学と今昔物語集」（『図説日本の古典——今昔物語』集英社より
近刊）

注2 特に多く参照させて頂いた先学の文献を掲げ、謝意を表する次第であ
る。

吉田精一氏『現代文学と古典』（至文堂）

長野管一氏『古典と近代作家——芥川竜之介』（有朋堂）

志村有弘氏『近代作家と古典』（笠間書院）

日本近代文学館『近代文学と古典』（読売新聞社）

長野管一氏、長谷川泉氏編『日本の説話——6・近代』（東京美術）

「国文学——解釈と教材の研究」（昭37・6）「近代作家と古典」特集

「国文学解釈と鑑賞」（昭42・2）「古典と近代文学の架橋」特集（特に、

平山城児氏、志村有弘氏編「古典に取材した近代文学一覧」）

（昭53・11・30）